

---

# 二周目の外道勇者！

ジャッカル東西田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二周目の外道勇者！

### 【Nコード】

N9053Z

### 【作者名】

ジャッカル東西田

### 【あらすじ】

最強の勇者としてゲーム世界に転生してしまった主人公であったが、既に大魔王も倒しエンディングも迎えてしまっていたので特になにもやる事が無かった。そんな勇者のころは荒んでいき……

### 【晒し中】

## 暇つぶしの午（ひる）（前書き）

主人公が外道です。

心温まる会話も展開も特にありません。

ファンタジー要素もあり……という胸糞悪くなる話なので、特別な性癖の方のみお進み下さい。特殊

## 暇つぶしの午（ひる）

「ヒヤッハアー！種もみを隠そうつたって無駄だぜえー」

世は凶作時代。俺は叫んでいた。天にも地にも誰にも恥じることなく。

鉄塊号（馬）の上に乗ったまま、必死に抵抗するヒゲを生やした爺さんから小汚い袋を奪い取る。

「ちッ！何だこれだけかよ？時化てやがんな」

袋の中身を確認し俺は鉄塊号から爺さんにツバを吐いた。

「お、お願いですじゃ。それは村衆が食べるのを我慢してなんとか用意した来年の為の種もみなのですじゃ！返して下され、返して下され」

爺さんが俺のあぶみに手をかけてくる。チッうぜえな。

「あー分かった分かった。返してやるよ」

手に持った小袋を爺さんに差し出す。爺さんはホッとしたのか暴れるのをやめ袋に手を伸ばした。爺さんが袋を掴みかけたその瞬間「フレイル！」

俺は炎術系魔法を発動。

袋はその中身ごと燃え上がった。

「ヒヤッハッハッハ？返してやったぜえ？お空になあ？」

呆然とする爺さんを尻目に俺は馬首を翻し荒野へと駆ける。

風が心地いい。

身を切るようなこの風が。

赤い岩棚、砂埃、植物も生えぬ大地。

（嗚呼、ここには余計なものはなに一つ無い）

そう感じながら

「勇者なんて……糞喰らえだ」

そう小さく漏らした彼の独り言は風の中に消えていった。

暇つぶしの午（ひる）（後書き）

作者もヒッハアー！

ダイヤの糞を捻り出せ！

「いいかッ？凡夫勇者パパの精液がシーツの染みになり、淫売僧侶ママの割れ目に残ったカスがお前らだ？じっくり可愛がつてやる、泣いたり笑ったり出来なくしてやるッ！」

東トルキス大王国。その中にひとつしかない国立勇者士官学校の訓練用地で俺は教鞭をとっていた。

訓練風景を見渡す俺。の座る『椅子』から

「ギギギギッ」

という歯軋りのような音が聞こえてくる。

「どうした『凡夫見習い一号』改め『勇者見習い一号』。苦しいのなら降りても構わんだぞ？」

orzのような態勢で俺を背中に載せた勇者見習いは叫んだ。

「レンジャイ？この程度何でもありません、レンジャイッ？」

日中の気温が35 を超えるなか早や2時間。なかなか根性のある凡夫だ。

「痛ぶり甲斐があるのは感心だ。初心者森に行つてゴブリンをフアックしてきていいぞ！」

「レンジャイッ？有り難う御座……」

そこまで言つて勇者見習いは微笑みながら崩れ落ちた。どうにも限界だったようだ。

国立勇者士官学校。

16歳を迎え『天の声』から啓示を受けた王国中の男子を集め

「清く、正しく、美しく！」

を合言葉にプロの勇者になるまで4年間厳しい訓練を課す勇者見習いの為の養成所である。

学費は国王から出ており無料だが、啓示を受ける者が年に4〜5人しか出ない為に強制入学のうえ退学は許されない。

先輩・教官には絶対服従。

座学以外は学年合同で行われる。

俺は週に二度、この国立勇者士官学校で特別教官などを務めている。まあさほど金になるわけではないが、イケメンリア充の上に生まれ落ちた瞬間神から祝福されたという才能溢れるフザケた勇者どもに『如何に自分が甘ったれた存在であるか？』

という挫折感を味合わせるのはそれ程悪くはない。

努力すれば大抵の事が叶う人種に

「努力してもどうにもならぬことがある」

と教えるのは大切なことだ。

そうすれば自分よりも価値が下の人間に優しくなれるし、尊大で横暴な振舞いもなくなるからだ。

ゆえに俺は奴らを『クソ以下』として扱うのである。

「『魔物マラソン』程度にいつまで俺の貴重な時間を割く気だ？さ  
ては貴様ら『勇者』ではないなッ？スライムのクソを掻き集めた値  
打ちしかないウジ虫どもッ？」

砂漠のような勇官校第七特別訓練用地。

熱い。そこに居るだけで灼熱のように暑い。

走ろうとすれば足が砂に取られ、また『蟻地獄』などの危険な怪物も自生しているので本来は隊列を組んだ上でゆっくりと進むのが正しい。



しかし、俺はそこをフル装備（フルアーマーで剣盾担ぐ）のまま40km走らせる。おまけに魔王から借り受けた魔物に勇者見習いどもを追わせているのだ。

結果、阿鼻叫喚！

気絶する者、淫売僧侶に祈り出す者、逃走しようとする者も現れた。そして、見事ゴールした猛者どもは俺の椅子にしてやる。

「貴様ら勇者が説く『友愛の心』だ！まさか仲間が未だ苦しんでいるのに自分だけゴールしたから終わりなどと思っていまいな？」  
そついうと大抵勇者見習いどもは

「ぐぬぬぬッ！」

といった後しぶしぶ俺の椅子になるのだ。

（いやあ〜『友愛』って本当にイイもんですね！）

更に1時間後

「死ぬか？俺のせいで死ぬつもりか？魔王は待つちゃあくれないぞ？とつとと死ねッ？」

かなりの人数がクリアしたが落ちこぼれどもはまだゴール出来ちゃいなかったたので発破をかける。

そしてなんとか全員ゴール。

勇者見習いどもは涙を流して全員で喜び合う。

「へへへ、あいつら胴上げまでしてやがる」

熱い友情に俺の目にも感動の涙がちよちよぎれる。

ま、全員クリア出来なきや連帯責任でもう一度死ぬまで追い込み掛けるからだけどな！

## 魔王との面会（18度目）

「お待ち下さい。少しお待ち下さい？」

そんな声をかけてまわり付いてくる門番を無視し俺は扉を開いた。

「魔王ちゃーん、遊びに来たよ〜」

玉座に優雅に腰かけワイングラスを片手に持ったポーズのまま魔王は口からワインを噴出した。

「キツタネエな〜！あ、それはそうと部下に魔王城の掃除ちゃんとさせてる？埃が積もってたよ？」

ひとしきり噎せた後、魔王はぎこちなく笑顔をつくる。

「ゆ、勇者殿。ほ本日はどのような御用件で我が城においでに？」

ビクビクとしながら聞いてくる。愛い奴め。

「なんだよ〜用がなけりや来ちゃいけねえのかよ〜？魔王と勇者は親友じゃなかったのかよ〜？」

「い、いえ！そんなことは決して。勇者殿と我が輩は義兄弟の契りを交わしておりますればッ？」

ぶんぶんと首を降り否定する魔王。愛い奴め。

「ふ〜ん、そうか……ならコレ分かるよな？」

そう言つて俺は気を溜めた。この魔王城を一瞬で消し去るほどの闘気を。

それを見た魔王はガクガクと膝が震え王座から転げ落ちた。側近である門番は口からブクブクと泡を出し気絶している。

「……ふう」

俺は展開していた闘気を身体の内抑え込み魔王に笑いかける。

「あ、あの勇者殿……これは一体なんな「アゲぽよ〜」!」ので  
魔王が喋っている途中に割り込む。

「はっ?」

魔王はよく聴き取れなかったのか間抜けな声を出した。

「おい?『アゲぽよ〜』って言われたら『アゲぽよ〜』って返さなくちゃ駄目だろうがッ!」

俺だけに恥ずかしいマネさしてんじゃネエ!と青筋をたてて怒鳴る。

「ヒイツ!」

俺の剣幕に怯える魔王。

「はあーっ……………怒ってないから言ってみ?『アゲぽよ〜』って俺に返してみ?」

深く溜息をつきながらも、本来なら打ち首の所を聖母のような慈悲深い笑みで諭す。そんな俺の威容に打たれたのか  
魔王はこくこくと頷くと

「あ、アゲぽよ……………」

なんとか挨拶を返した。しかし

「違うッ?もつと元気よく!『ぽよ〜』の後ろに!(ビックリマーク)を三個付けるくらいな気持ちでッ?」

俺は頭を掻き毟りながら指導。しばらく

「アゲぽよ〜」

「違うッ?」

「あ、アゲぽよ〜!」

「ちよつと良くなった!」

「あげぽよ〜!!」

「惜しいッ?『アゲ』は『あげ』にしなくても宜しい!」

「『アゲぽよ〜!!!!』」

「それダッ?」

こんな風景が魔王城に出現した。

一息ついた後

「あの勇者殿、先ほどの『アゲぽよー!!!』には如何なる意味が？やはり直前に勇者殿が凄まじい闘気を溜めておられたように極大呪文か何かの詠唱なのですか？」

魔王は心もちワクワクした様子でこちらに尋ねてくる。

（さて、どうしたものか？別に闘気を高めたのにもさして意味は無いのだが。……ここまで期待している魔王に真実を話すのは余りに酷だ。しかしさりとて「これはスンゲー呪文なんだぜツ！」と欺くのも胸が痛い。ここは……）

「やはりイオナゾン級以上の破壊力なのでしょうなあ……いや、私も1時間以上勇者殿に特訓していただいた甲斐があるというものです！今から使うのが楽しみですな！ハッハッハッ？」

魔王の瞳は夢を追う子どものようにキラキラと澄んでいた。

……なんかム力つくな。

そんな魔王に俺は小さな声で

「……………ない」

「はい？勇者殿なんですか？」

一旦笑いを納め、こちらを見つめる魔王。その瞳が魔族の癖に勇者<sup>おれ</sup>の濁ったそれよりも綺麗に澄んでいるのでイラッと来る。

「意味など……………ないツ！極大呪文でもない。というか呪文ですらナ

イ？俺はもう帰る、不愉快だ？あとそれと怪物共にキッチンとこの城を掃除するように伝えておけッ！貴様の城の埃を吸い込んだせいで一秒でも俺の寿命が縮まったなら、貴様ら全員悪虐非道の限りを尽くし拷問にかけるからナッ？」

魔王にそう告げ腹パン。疼くまる魔王を置いて謁見の間を出る。

ムカムカしていたので、とりあえず魔王城の窓ガラスを釘バット状の武器『穢竇剥剝夢酢』で叩き毀してから自宅に帰り、魔王からパクツた酒を片手に不貞寝した。

## 勇者のシノギ 其の一

「今日こそ『ここ』から退去ていそいってもらうからな！」

打ち合わせ通りのセリフが俺の待つ通りにまで響いてくる。

「嫌です！『ここ』は主しゅが住すまう家です。邪悪じあくな者、あなたこそ出ておいきなさい！」

女の叫ぶ声。に混じり小さな子どもの泣き声も聞こえてくる。うるせえななく。

「そうは烏賊のコンコンチキ。土地の権利書はこっちにあるんだ。それに今日は凄すごいお方を呼よんである……」

まったくひどい三文芝居だ。脚本書いたのは俺だけだな。

「総代せんせエ！総代せんせエお願いします？」

やれやれ、行くか。

俺はゆつくりとその【教会】へと入っていった。

「ゆ、勇者様ッ！」

俺を見たまだ若いシスターは驚きの表情を浮かべた。

それはそうだろう。第一級勇者なんて滅多に見られるモンじゃない。天然記念物級だ。

「へへ、センセエすいやせん」

黒服の男が頭を下げる。俺は銀縁眼鏡をかけた黒服の肩にポンと手を置き

「さて、何やら騒さわぎになっているようだが……この『勇者』が解決しよう」

『勇者』の部分のことさら強調し【仕事】にかかった。

おっぱいのかい（パイオツカイデー）のシスターは語った。  
この教会で親を亡くした身寄りのない子どもたちを育てていること。  
ある日、賭け事好きの前司祭が教会の土地の権利書を持って蒸発したこと。

翌週から黒服の男たちが現れ権利書を盾に立ち退きを迫られていること……

「ふむ……教会だけでなく孤児院のようなこともしている訳か」

顎をさすりながら餓鬼どもを見る。なるほど、どいつもこいつもキツタナイ格好をしているわけだ。

「はい勇者様の仰る通りです。ここは『空神ゼルデアス』を祭る教会でもあるのですが、行き場のない子どもたちの安息の場でもあるのです」

鋭い目で銀縁眼鏡を責めるように見ながらパイ乙カイデーは訴えてくる。

「なのに……この黒服の男たちは窓から蛇を投げ入れてきたり、薬屋や武器屋から私達が頼んでもいない薬草や武具を届けさせたり、拳銃の果てに拡声魔法を使ってわ、わたしの胸のことを『男を惑わす魔乳』と悪く言ったりして……」

「そいつはヒドい」

間髪入れず俺は顔をしかめた。半笑いになりそんな顔面の表情筋を抑えるのに苦労する。

（それ全部俺の指示したモンだしなあ）  
と思いながら……

~~~~~  
説明しようッ！



『窓から蛇』  
スネーク

【地上げ】の初歩の初歩の嫌がらせだ！読んで字の通り、ターゲット目標の家の窓から蛇を投げ入れたり、亜種として郵便ポストなどにイモ虫を大量にぶち込んだりするゾ！

精神的破壊力は抜群ダっ！特に女性によく効くゾ？

『ピザ屋にイタ電』

この世界のデリバリーを頼める飯屋・雑貨屋・薬屋・武器屋などからターゲット目標へ「何故か」大量に頼んだ覚えのない注文が届けられるといいやがらせう代物だ！

これをやられると地味に困るッ？

（この世界にピザ屋はない。電話もないが）

『騒音おばさんゴッコ』

黒塗りの街宣車のようなものでターゲット目標の家の前に堂々乗り付け、スピーカーから延々と目標の人格攻撃（悪口）を繰り返すゾ！

この世界に街宣車やスピーカーはないが、拡声魔法を使えるのでそれで悪口や恥ずかしい過去を余すことなくご近所にお伝え出来るんだッ？

亜種として目前で洗濯ものなどを叩きながら

「引っ越し！引っ越し！さっさと引っ越し？シバくぞ」

と法に引っかかるかからぬ様にヤル猛者もいるゾ！

この場合やる方、やられた方双方に大変な精神疲労をもたらす高等テクニックだ。注意しろッ？

ちなみにすべて俺が元いた世界から持ち込み伝えたモノだ！以上ッ？

~~~~~

「本当かねチミイ？」

俺は銀縁の方へと顎をしゃくった。

「……確かに行過ぎた行為があつたことは認めます。しかし、これも自分達の仕事なのです！土地売りが土地を手に入れられなければ飯の食いあげになってしまう！勿論土地の権利書は『合法的』に手に入れたものです？」

『合法的』の前に『IKASAMAギャンブルで』が抜けとるよ。

「た、確かにそちらの言い分もあるでしょうが……『土地の権利書』はそちらにあつても『教会の権利』はこちらにあります！いきなり出ていけは失礼でしょう？」

我に理は有りとばかりに【教会の権利】を俺に示すシスター。

「ふう……」

（バレないようシスターの乳を横目で盗む見ながら）俺は書類に目を通し、わざとらしい溜息をついた。

問題をややこしくしているのは土地と教会の権利が別であるという点である。

本来この世界では土地を持つ者がその土地の建物も好き勝手に扱えるのだが

「この岩の上にわたしは教会を創ろう」

とこの世界の神が言ってから、岩は人の物だがその上に建つ教会はバカの物という暗黙の了解があるのだ。

故にこのような争いが発生するのである。

そして、そこに俺のような「清く正しく美しい勇者」の調停人に出番が回ってくる。双方の言い分を聞きどちらが正しいのかを決する

のである。

が、どちらかというと今は【教会】の方が身びいきされている。単一の教会は怖くなくともバックにいる【大聖堂】の威光は絶大だからだ。

その証拠に俺が登場してから牛スターは若干安堵しているし、餓鬼どもは俺にキラキラとした瞳を向けてくる。うぜえ。

「ではこうしてはどうでしょう？まず乳。じゃなくてシスターが教会の権利を一旦地上げ屋さんにお譲りして、然る後地上げ屋さんはわたしにこの教会と土地を売る。そしてわたしは神の欲するところを為す……というのは？」

俺はスライムを半日いたぶる時のような優しい微笑を浮かべて二人に提案した。

「えーと、自分はそれで一向に構いませんが……」

銀縁が戸惑った演技をしながら第一に賛成する。脚本通りだ。

「ゆ勇者様！それはもしかして？」

シスターがその巨乳を揺らして昂奮気味に椅子から立ち上がる。

「おそらく、貴方が考えておられる通りではないかと……今日ここにわたしが招かれたのも神の思し召しでしょうから」

俺はパイ乙の肩に手を置き出来るだけ誠実な笑みを浮かべた。

「ああ、嗚呼、やはり神は視ておられたのですね？有難う御座います！ありがとうございます勇者様！」

ヤクでもキメてんのか？というくらい喜び俺の手を握ってくるシスター。

「じゃあチャツチャツとやっちゃいましょうか」

俺はステンドグラスのそばにある『磔になっている男の像』を見上げ仕事の成功を確信した。

……  
……  
……

「はい……ではこれで、この教会と土地は社ちよ……ごほん。勇者様のモノとなります」

黒服は眼鏡をクイッとあげシスターの名前の入った【誓約書】を俺に渡した。

「うん。じゃッ、そろそろ帰るか！帰りに焼肉メシでもどう？」

ねぎらいも込めて黒服に声をかける。俺の言葉に、黒服も仕事が一段落ついたからか和やかな笑みで頷いた。

「いいですねえ。あ、そういえば最近わたし総代せんせエに教えて頂いた『

ゴルフ』をやってるのですが、なかなかスコアが伸びなくて……」  
スウィングの真似をしながら黒服は恥ずかしそうに笑う。

「ほう、いまいくつだね？」

「ようやく100を切ったところです」

褒めてほしそうに眼鏡クイクイすんな。

「いやいやそいつは大したモンだ。今度買い上げた土地に練習場でも造ろうと思うとるんだが……来るかね？」

「行きます」

間髪入れずに答える黒服。こやつかなりのスキモノのう。

ハッハッハッハッ！俺と黒服の上機嫌な笑い声がユニゾンで教会に響き渡った。

「あ……あの、勇者様？えつと……土地の権利書をお譲りして頂けるのでは？」

気づくと乳牛が俺の横に居た。

「あ、いたの？」

そうか忘れてたな。まだ仕事だった。

「シスターさん」

俺は迷える子羊の肩にガツシリ手を置いて慈愛の眼差しで彼女を見詰めた。

「は、はいッ？」

びくりと背を伸ばすシスター。

「神は仰つられました。

『嘘をつくことなかれ』とね。

しかし『欺くことなかれ』とは決して仰られてはいないのです。

つまり嘘さえつかなければ、わたしがあなたを騙して教会を手に入れることも神は認可しているのですよ。

それは何故かというと神自身が詐欺師ペテンだからです。

神様ってのは、自分に都合の善いものは、奇蹟”ですべて片づけ、逆に具合の悪いものは”試練”で済ますマッチポンプ機構やっつけです。

つまりわたしがあなたを騙し、あなたが教会を失ったのもまた『神の試練』というやつですな」

シスターが気絶した。

やれやれ刺激が強すぎたか。

「おい、あとでこのシスターと小汚いガキども『大聖堂』宛に着

払いで送つという」

まあ後はなんとか向こうでやっていけるだろう。

黒服の手下に連絡してもらい、俺は教会を出る。

ふと、後ろを振り返ると光の射したステンドグラスを背景に『吊り下げられた男』がこちらを哀れんでいるように見えた……

## 勇者のシノギ 其の一（後書き）

勇者<sup>ワシ</sup>の凌ぎは108式まであるぞ！

シスターを風俗に沈める……という案もあつたんですが、生々しくなるのでやめました。

あと、この世界の神様とキリストは全く関係ありません。一応。

## 王冠に輝く栄光

「そこでよー。俺は大魔王に言ってやったんだよ」

いつの間にか俺の周りには黒山の人だかりが出来ていた。

「今のは『あげぽよ』ではない。『ぽよ』だ……ってよー」

おおー、とどよめく一同。

「さすが勇者様だ……」

「まさか大魔王に『ぽよ』で勝たれてしまつとは！」

「すごいですわッ！勇者様？」

「ふむ。『ぽよ』系呪文ですか。ふむ、私も少しなら使えるのがね。ふむ」

いや……お前らゼツテエー意味わかってねえだろ？

というか話してる俺ですら、自分で自分が何言ってるのか1パーも分からん。

特に最後のやつ。何だよ『ぽよ』系呪文って。

『メラ』っぽく云えばいいってモンじゃねえぞ！

カーペット

赤い絨毯。無駄にデカくて高そうなテーブル。その上に山と置かれた料理と酒。あと人人人。

そんな超高級ホテルの披露宴会場

ぽい中で俺は酒を飲んでた。食っては飲み、飲んで食って、たまに寄って来る貴族ども相手に法螺話を繰り返しているのだ。

何故こうなったかというと……



【トルキスト王誕生祭のお知らせ】

俺の住むゴイールの森の木家<sup>ログ</sup>に王族からの使者が来たのは二週間前のことだった。

なんでも現国王の誕生日を盛大に祝うパーティーがその日城で執り行われるらしい。そして、箔をつける為大魔王を倒した勇者である俺にも是非出席して欲しいとのことだ。

まあタダ飯タダ酒に招かれるのに否やはない。

しかし酒の肴に大魔王との死闘（笑）や国勇校での訓練内容などを話してくれというのが面倒くさい。

大魔王との戦いなんてコツチ転生してからは無かったし……即、無条件降伏だったからな。

「一度目に倒しに来た時みたくもう一度『世界の半分』のくだり聞かせて下さいよ？ん？」

つて大魔王さん（笑）にニヤニヤしながらお願いしたら

「サーセンしたああア？」

つて土下座された。

（まあ、でつち上げて適当に場を盛り上げればいいんだろうが）

そう考え、やたら偉そうな態度で接してくる40代くらいの王からの使者に

<sup>メッセンジャー</sup>はい

「おい走狗坊主。俺と対等な口キクなんざ10万年早えんだよ」

と顔面に握りつ屁をカマし、ついでに肩パンしてから彼の額に出席の墨で点けて送り返しておいたのだ。

（彼こそ使者のなかの使者だ。他のやつも顔に要件書いとけ）

そして今現在、その誕生祭の真つ最中なのだが……  
どうにも俺は王族？貴族といった連中が苦手だ。

「王族どもは着飾<sup>きでく</sup>つてはいるが、性根が腐っているので民草<sup>ヒヤッハー</sup>を搾取して憚<sup>おそ</sup>ることはない。

しかも、それは先祖代々に渡り脈々と受け継がれて来たものだ。そもそも他人から掠め取った財で富を成した盗賊の親玉が豪族に成り、自ら『王』を名乗ったのがこの国の王族の起源<sup>はじまり</sup>だ。

王侯貴族は生産活動は何ひとつ出来ぬ上自分で自分のケツも拭けない。そのクセ権力には貪欲で余計なことばかりする……という二トにも勝る廃スペックうんこ生産機だ。きっとその頭の中を搔<sup>か</sup>つ捌<sup>は</sup>いてみれば脳みそではなく糞屑でも詰まっているのだろうな。

そんなワケだから、王とはそれら盗賊の中で一番腹黒くあさましい者でありその子孫<sup>なれのはて</sup>はカス中のカス。キング。つまりカスの王に相応しい。キングスライムならまだ王としての威厳があるが、キングカスには何もない。その頭に嵌められた王冠もカスの王であるコトを示す為と中身の糞屑を隠す為に使われているだけだ。

しかし馬鹿の大将とはいえ、馬鹿でも歳はとるのでここはひとつ馬鹿っぽく盛大に祝って差し上げようじゃないか」

いつの間にか俺の心の中の声が拡声魔法で会場に垂れ流されとった。

（あれ？いつのまに！）

ふと気づくと、何故か壇上に上がっている俺。

貴族どもの引きつった顔と赤い絨毯がユラユラしている。周りを見ると、司会ばい人間と王の近衛が何人か俺のそばに倒れていた。

（えー、確か……………）

うろ覚えだが、泥酔状態の時の記憶をなんとか引き出す。

飯食って酒飲んで適当に貴族どもあしらった後、壇上で大魔王との死闘（笑）の話をさせられて、各国からの祝辞が適当に読み上げられてる間に俺はまた酒飲んで。その後……………

ああッ？そうだ？

ポンと手を打つ。

いよいよ王の登場になったんだ！そんで……………

壇上に王を登場させる前に『現王が如何に素晴らしいか人物であるか』という前口上を司会者がペラペラ延々と話す　ベロンベロンに酔った俺が長話に激昂　嘘ばっかつく司会を殴りとばす　拡声魔法を使い『王侯貴族が如何にカスであるか』を説教　警備の近衛兵慌てて止めにはいる　会場にいる近衛全員を殴り倒す　軽い運動でヒートアップした俺更に言いたい放題……………のコンボを華麗に決めちまっただった！

「えー……………、それではッご登場して貰いましょう！偉大なるトルキスト王ご本人です！どうぞー？」

ヤケクソになり場を無理矢理盛り上げる。

しかしというかやはりというか王は出て来なかった。

ひとが必死に頑張つて会場の雰囲気のアゲアゲしてるのに出て来ないたあふてえ野郎だ！

仕方ないので、気絶し倒れているジャパ　ットたかた風の司会を引きずってくる。

「今日から彼がこの国を治めることに相成りました！お誕生日おめでとうございます王様！ハイ、拍手さんせいッ？」

会場にいる貴族全員を目で殺す。拍手しなければ、新王への祝いにお前らの血でこの豪華な絨毯を染め直すことになるのだ……と。

……

……ばち。

……ぱちぱち。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ？

拍手が鳴り止まない！

「ああ、いま皆の心がひとつになっている……」

そう俺は強く感じた。

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

人々が皆顔を引きつらせて笑っている。  
まるで……エヴァの最終回。

こうして

この日、東トルキス大王国に新しき王『たかた』が誕生したのだった。

## 幕間（前書き）

シリアス展開……のような気がします。

## 幕間

「インドウアナ人を右に」

囁れ声とともに白黒の盤面<sup>マス</sup>に置かれた駒が動かされる。

月明かりが照らし出すモノグラムの盤面では、今しがた置かれた精巧な褐色の騎馬兵<sup>こま</sup>がこれもまた精巧に模された青色の城<sup>こま</sup>に肉薄していた。

そして、その白黒盤面<sup>せかい</sup>の主である指し手はひとつ駒を動かすとまたしばらく沈黙する。

顔は宵闇の中に紛れて窺うことが出来ない。

しかし、一手打つ度に精魂尽きたようにソファアにもたれ掛かる様はとてまただの娯楽<sup>あそび</sup>のようには見えない。

その証拠に『彼』の対面には誰もいない。

指し手は『彼』ひとりであり、余計な会話もなく淡々と盤面の様相は変化する。

但し、一手駒<sup>ひとこま</sup>を動かすのに五時間。それがこの『彼』の誓約である。

「いつからだろうか。わたしがこの『座』を離れることを諦めてしまったのは……」

緊張と弛緩。一手打ち終えた後の五時間が彼に訪れる安息<sup>くつろぎ</sup>である。

本来であれば逆かも知れないが、この『考慮時間』が彼にとっては何よりも耐え難い試練である。

『座』から逃れられぬ彼には、無為な思索<sup>くわくそく</sup>で己を慰めるに他はない。

世界を司る『神の座』。

その座を手に入れた者は世界<sup>ばんめん</sup>を思いのままに操ることが出来るとい

う。

「もしも、自分の望むがままの世界を創造り上げられたなら！」  
人々は希望のぞみを胸に想う。

が、

神の御手により世界は進む。

在るべき未来、在るべき方向へ。

そうして人にはそれ程の力はない。

ただ神の機械として地を這いずることしか出来ないのだ。

『彼』に与えられる一手。しかしそれは彼の意味ではない。

『神の意志』  
ちから

腕が、手が、指が。

彼の意識を無視して動くのだ。

五時間……

再び『彼』は駒を進める。

いつ終わるか分からぬゲーム。いやこの盤面に果てなどないのかも  
せかい  
しれない……

そんなことを考えながら彼は

何者からか与えられる次の一手を待つ。

だが

「……………」



城が勝手に動いた。

そんな馬鹿な……と彼は自分の目を疑った。  
ここ一万年、そんな事件はなかつたのだ。  
有り得ない。それが彼の出した結論である。  
そつと、動いた『城』に触ってみる。

その瞬間

「はははははははははははははははは！あははははははははははははははは！ひひひひひひひひひひッウフフフフフフフフフフフフフフフフ？ひいひいひいひいひいヒイ」  
駒を通して下界に視えた光景に哄笑する。

ひとしきり爆笑した後

「そうか勇者か！勇者がやったのか？あはははははははは。成る程、道理で視えぬはずだ！世界を導き出す勇者がこんな行動を取るとはナッ？」

息も絶え絶えに言葉を搾り出す。

「宜しい。ならば、この虚妄世界の網を断ち切ってみたまえッ？ほ  
うら戦争だ。もう直ぐ戦争が始まる！その時には『勇者』。君は何  
を選択する？欲望か？人命か？それとも世界の意志か？わたしはい  
まだ硬直の融けぬこの『座』で運命を鑑賞するでしょう」

ソファーにもたれた彼はいままでにないほど明るい顔をしていた。

## 幕間（後書き）

中二病全壊！

風呂敷を広げられるだけ広げてみました。ありきたりだけど。

どうやって畳むんだ……

「ひゃっはぁー！」してる勇者がいれば…と思って書き始めたのにどうすんだよコレ。プロットなんか当然ねえぞ。

あと、そういえば

二話の釘バット武器がおもくそ戯言の

シームレスハイアス  
『愚神礼賛』

だった件。

（本当だ！いま気づいたんだッ？信じてくれ！）

## 勇者の回想      決意の朝に      【前編】

この世界にやって来てからもう10年あまりが過ぎた。  
何日も何日も何日も何日も何日も何日も……  
なにもない日々が続いた。

魔王は倒れ大魔王は倒れ、この世界は完結した筈だつた。  
いや、完結していなければおかしいのだ。  
なのに、  
なのに、

「何故ぼくはここに居るんだろう」  
幾万も繰り返した問を今日も発せずにはいらなかった。

あれはそう10年前だ。  
まだ現実世界にいた頃。  
当時通っていた学校から帰宅し、精神失調気味の母を週一回の施設  
に一度送ってから溜まった家事をこなした後、いつものように一度  
クリアしたこのゲームのカセットをゲーム機に入れた……

深く険しい峡谷に佇む勇者の背中を背景にした題名がTV画面に浮  
かび上がった。  
そして……気づいたらコッチに「いた」のだ。

最初は

何故。

と思った。

いや実際は何が起こったのかわかってすらいなかった。ほんとう

教会のすぐ近くで倒れていたらしい。ひどく衰弱していたので保護され、なんとか命は助かった。

教会を出るまでお世話になったシスターといろいろと話したのだが、半分くらい何を言っているのか分からなかった。

ここはゴルドア王国のサント村にある地神「ネイディア」を祀る教会であるらしい……

シスターが『神』へ祈っていたところ、突然御告げがあった戸いう。

「外に倒れている者があるので、手厚く介抱しなさい」と。

「だから私わたくしとあなたの出逢いは神に祝福されたものなんですよ？」

俺を介抱してくれたシンシアと名乗る老シスターは心から神を信じているようで、あまりに誠実に語ってくれるので

「いや……なんか、その、いろいろとおかしくない？」

と突っ込みを入れることが出来なかった。

翌々日、立ち上がれるようにまでなったので外の様子を見に行つた。老シスターはすごく優しくていい人だが、ちよつと「アレ」なのかもしれない。話している感じからかなりの『ズレ』を感じた。

「アレ」な人の扱いには慣れている。会話はなす際には相手のいうこと

を否定してはいけないのだ。

ゴルドア王国など聞いたことがない。それに魔法。魔王、大魔王に  
モンスター  
怪物。

彼女のいうことを一々否定しなくとも、外の様子をみればここが何処かわかるというものだ。

「アレ」といえば……母は大丈夫だろうか？

施設に送ったきり、夜にも迎えに行けなかった。それにもう二日も経っている。

自分がいなければあの人は多分簡単に死んでしまう……

社会的な意味でも人間的な意味でも、そして

精神？肉体的な意味でも。

多分、施設の職員が預かっていてくれると思うのだけど……

不安を抑えきれない。だが、何より今はここが何処かを知らねばならない。

家に帰る為に……

サント村とやらの通りに出る。

教会の木でできた扉を開け放った瞬間、馬車がいきなり目の前を通り過ぎて行った……

そして、地面はアスファルトなどではなくただの土。遠くには露店のようなのがいくつも軒を連ねていた。

「えっ？ハ？」

近代的なものがなにひとつない。

マクノデイルドー、牛井の竹屋は言うに及ばず道路やら電信柱もな

く自動車も何処にも走っていない。

その証拠？に、通りを鎧兜に身を包んだ一行が徒歩で町中を横断する。

背中に剣。盾。

或いは斧、杖や弓を持って……

「そんな馬鹿な……」

どう見ても日光時代村には見えない。

倒れ込みたくなるのを抑え、一番近い露店の主に声を掛けてみる。

「あの……」

「兄ちゃん、客かい？いや今日は朝から一人も客がきてねえんだ。安くしとくぜ！」

今まで暇そうにしていた露店の主人はダミ声を張り上げた。

「えっと、はい……ここでは何を？」

見たところ、草が置いてあるだけで他にはなにもない。お茶か何かなのだろうかと思って尋ねてみる。

「何をつて……見りや分かんだろう？薬草だよ」

主人は怪訝そうな顔を隠すこともなくそう告げる。

「や、薬草？」

漢方とかのことだろうか。

「そうさ。これ一つで、毒消し？体力回復？滋養強壮！なんにでも効くぜ！まあ多少値が張るがよ」

主人は自信あり。といった風に飾られていた草をとり手で匂いをかく。

「はあ……」

弱々しく頷く。

納得できるような出来ないような……

毒消し……どこだみ茶みたいな感じなのだろうか。

「……ニーちゃん。さては冷やかしだな？さあ帰った！帰った！俺はこれでも商人なんだ、冷やかしに売る油までないぜ？」

そんな様子に、主人は正体見抜いたりとはかりに手を振った。

そうやって早々に追い払われ、とりあえず一度教会に戻ろうかと考えていた矢先

「モ、モンスターだー！」

そんな叫び声が露店市場全体に響き立った。

砂煙が町の入口から、市場に向かって立っている。

そして、その先頭に牙を生やした巨きなイノシシのような動物が10匹ほど一直線に他には目もくれず突進してくる。

「ヤベエ！ありやグレースケイルだ？攻撃力がかなり高いモンスターだぞ！ニーちゃん、早く逃げるんだ？」

ぽーっとイノシシを眺めていた俺は薬草屋の主に手をとられ、大きな家の物陰に連れ込まれた。

「アアッ？やつら俺の店を壊しただけじゃなく薬草を食ってやがる？なんてこった……いつか趣味のいい軒家の店を構えるのが夢だ

ったのによー！」

布を噛み涙ながらに主人は言う。

一体なにが起こっているのか分からないが、何やら大変なことらしい。

近くに避難していた他の露天商たちも悔しそうに成り行き見守っていた。

「嗚呼……あいつが来たら店も商品も全部ダメだ。壊されて喰われて踏み潰されて。終わりだ……」

すべてを諦め落胆する人がいる一方

「チックシヨ〜〜！勇者様は何やってんだ？大魔王はもう死んだんじゃないのかよ？最近またモンスターも町にまで出てきてるぞ！」

と怒りも頭にも地団駄踏む人もいた。そんな中

「もう我慢ならネエ！俺の店を好き放題しやがって？」

隣にいた薬草屋の主人が隠れていた軒先からへと飛び出した。

「馬鹿、やめろ！あいつらは腹が膨れたら勝手に山に帰っていくんだ。店がなくなったからって命まで賭けるこたあねえ？」

露店商の一人が叫ぶが、男の耳には聞こえていないのか一目散に市場目掛けてかけて行く。

「おいテメエら！」

ふごふごとその巨きな鼻で地面に落ちている商品を漁っていたイノシシに薬草屋は声を張り上げた。

ふご。ふごふご。

イノシシは地面に落ちている餌を食べることに夢中で、呼びかけに



気がつかない。

「て、テメエら？な舐めやがってえー」

薬草屋は懷から小さなナイフを取り出し、今だ地を這いずり回るイノシシに向かっていく。

「……ッ！」

その瞬間。俺には薬屋が煩そうに顔を上げたイノシシの突進を受け宙を舞うビジョンが見えた。

（こ、これは？）

まだ薬草屋とイノシシとの間には大分距離がある。  
だが……

「他人に優しくするとね、自分もなんだかお日様みたいにポカポカしてきてね。とっても幸せな気分になれるの！」

思い浮かんだのは、父さんが逝く前の口癖だった母さんの言葉。  
久しく思い出すことのなかったあの人の優しい横顔。

何故、今、どうして。

そんなことを考える間もなく俺は薬草屋とイノシシとの間に向かって駆け出していた。

勇者の回想      決意の朝に      【前編】（後書き）

勇者が何故外道に成り下がったか理由を少し考えてみました。

まだ途中ですがご指摘頂いた点を受け、あとで話全体を改稿しよう  
と思います。

## 勇者の回想 決意の朝に【中篇】

（間に合え！間に合え！間に合え！間に合え！間に合え！間に合え！間に合えー！）

風が鋭く流れていく。疾く、疾く、疾く。自分でも驚くほど疾く目標に近づいていくが、まだ身体が全快していないからか動悸がひどく激しい。

地面を漁っていたイノシシの中の一匹が薬草屋に気づいた。前足で土をかき頭を低くし突進の前動作を行う。

イノシシが走り出す。

その瞬間、俺は力の限りに薬草屋を突き飛ばしていた。

薬草屋はよろけながらも、少し離れた家と家との隙間に吸い込まれていった。

「フゴォー？」

雄叫びを上げ、突進してくるイノシシ。

全身全霊で走って来た上、一人を突き飛ばした体勢のままでは避けらそうには思えなかった。

ドクン！ドクンッ！

心臓が血を強く押し出す音が聞こえる。

イノシシとの距離はあと3メートルもない。

この後に確実に訪れるであろう死。  
わからない。どうなるのか分からない。恐ろしくて、ただ目を閉じた。

しかし

目を閉じてどのくらいの時間が経ったのか？

10秒か20秒か、1分かそれとも10分か？  
身体になんの異常も感じられなかった。

「ああッ！勇者……勇者様だ？」

そんな声が聞こえたような気がする……

ゆっくり目を開けてみると、襲ってきたイノシシとまだ市場で地面を漁っていたイノシシの群とがオーロラのように揺らめく光の壁の中にいた。

「ふギイ！プギイー」

そんな鳴き声を上げ光の壁に突進を繰り返しているのだが光の壁はそれを押し返し、攻撃を受ける度に光の壁自体が段々と狭まってく。

ついには、満員電車のようにイノシシ一体分のスペースしかなくなってしまった。

それを確認した俺は安堵からか倒れてしまった。

「勇者様！勇者様ッ？勇……」

駆け寄ってくる足音。人々の叫ぶ声が段々と遠くに聞こえて……

「どうして、あんな無茶な真似をしたんですか？」

教会で再び目覚めた時、これ以上ないというくらいシスターは喜ば

れた。そしてこれ以上ないというくらいシスターに叱られた。

「如何に勇者様とはいえ！体調が万全でないのなら自重すべきです！物は壊れてもまた修理したり新しく買ったり出来ますが、貴方の命はひとつつきりしかないですよ？」

見舞いに來た露店商たちも驚くぐらいの勢いで懇々と命の大切さを説かれたのだった。

「シスター、勇者様が倒れたのは俺たちのせいなんです。店や商品がモンスターに無茶苦茶にされてるの見てカーッと なっちゃまって

……」

だから勇者様に責任はないんです。

薬草屋の主人が助け船を出してくれなければ、ずっと神から与えられた生命の素晴らしさを説かれそうだった。

「10日はなにもしちゃ駄目ですからね！」

メッ？とでも語尾につけそうな風に言い放つと病人食を作るんだと言って部屋から出て言ってしまった。

それから何日かして教会の司教とかいう人が会いにやってきた。

いその人はこちらの顔を一目見るとはっとしたように一礼して出て行った。

次の日、王城に連れて行かれ冠を被った白ヒゲステッキの王様から「大魔王を倒した勇者」であることが告げられた。

意味がわからない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9053z/>

---

二周目の外道勇者！

2012年1月13日19時59分発行